隷徒 1
聖香の章

あんぷらぐど
荒縄工房

荒縄ＳＭ文庫

隷徒　１

聖香の章

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行

扉・イラスト

月工仮面

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

ＳＭ雑誌に「仲ゆうじ」名でＳＭ小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにゃふにゃ」「あんぷらぐど」名でＳＭ小説を執筆。独自の自虐的ＳＭ、一人称による告白形式の作品、伝奇ＳＭ小説などを発表し続けている。東京在住。

表紙・扉・奥付のイラスト提供

月工仮面「極彩色の雨」

http://gekkoumask.blog14.fc2.com/

扉・イラスト　３
主な登場人物　１０
本性　１１
証拠　３１
学長　５６
隷徒　６９
朝礼　８６
休み時間　１０９
放課後　１４８
水着　１７６
保健室　２０２
肛虐　２３１

懲罰　２６２
シリーズ紹介　２９０
奥付イラスト　２９２
奥付　２９４

主な登場人物

花沼聖香　変態妄想癖の学生。

翔子　聖香の姉。専門学校学生。

佐恵子　聖香、翔子の母。シングルマザー

奥沢社長　奥沢工業の社長。荒縄学園のＯＢ。学園の後援者。町の有力者。

克也、圭俊、一毅、健介、千晶

チームＡのメンバー。チームＡは代々、先輩から推薦されて選抜される成績最優秀な学生たち。学園の秩序・環境維持のための活動をする。隷徒の管理も担当している。

本性

私、聖香は、荒縄学園に転校してきた最初の日に、チームAと呼ばれるグループに目をつけられてしまいました。

それは夏休みが終わって、新学期の初日。

緊張していたので、彼らに注目されていたことはまったく気づきませんでした。

チームAは不良ではなく、その正反対。品行方正な男四人と女一人のグループです。

柔らかな笑顔、さらさらのロングヘアーの千晶が、最初に声をかけてくれたとき、転校したばかりで、友

だちのいない私は、とてもホッとしていました。
「聖香はアイドルの誰かに似てるわね。かわいいわね。髪もサラサラ。うらやましいわ。仲良くしようね」
彼女は学園のことを教えてくれて、励ましてくれました。
授業が終わると、一緒に帰り支度をしていた千晶は、いろいろ話しかけながら、校門までついてきてくれました。
そこに男四人が待っていました。
「克也、圭俊、一毅、健介よ。私も含めて、みんなからチームAって呼ばれているの。正式な組織じゃないけど、学園ができたときから続く特別な存在なの」

「特別？」
「チームＡは優秀な学生の中でとくに学園の秩序維持に関心が高い人たちが選ばれるの。卒業していくチームＡの人からスカウトされるわけ」
千晶が、四人を紹介してくれます。男に囲まれて、ちょっと表情が曇ったと思います。
「聖香って言ったね。さっそくで悪いけど、妙な情報が入ってるから、一応、確かめるんだけど」
もっとも体格のいい克也。
「なんでしょう」
足が震えてしまいます。
怖いのです。

校門はすぐそこ。多数の学生や教師がいます。いまなら逃げることができるかも。でも、足が動きません。
転校早々、問題を起こしたくありませんでした。
「もし、聖香が、情報の通りの人なら、ぼくたちはこの学園を守るために、あなたをコントロールしなければならなくなるのさ」
長髪でおしゃれな圭俊が言います。
「意味がわかりません」
「これを見てほしい」
克也はスマホの画面をこちらに向けました。
お尻の画像です。顔は画面の外に切れています。若い女性がお尻を向けています。

「なんのことか、わかりません」
とっさにそう言うしかありません。
「このお尻のところに、文字が書いてあるよね。なんて書いてあるか、読めるだろ？」
目つきの鋭い小太りな一毅が、太い指で画面を示します。
「読めません。よく見えません」
少し目が悪いのです。
「うそを言ってはいけないんだよ。ここではっきりさせておこう。ぼくたちにうそを言うのだけはダメだ。取り返しがつかないことになっても知らないよ」
四人の中では子どもっぽい健介が言います。

「妙な言いがかりはやめてください」
目を背けます。
「もう一度だけ、聞く。ここになんて書いてあるんだ」
克也の低い声。
「わかりません」
目をつぶります。
そのお尻には、マーカーで「マゾ娘　聖香」と書いてあるのです。見なくてもわかります。
「確認しないといけない」
「うそでしょ……」
逃げようとしたところを、千晶に強く手首をつかま

れました。目鼻立ちのしっかりした彼女が、ゆっくり首を横に振ります。目が怖く、真剣です。
「確認は千晶がする。おれたちは向こうを向いている」
「いま、ここで！」
逃げよう。なんとしてでも。明日から学校には来ない。それでいいではないか。
実際にはとてもできないことです。ただ、その一瞬はそう思ったのです。
「約束するわ。見るのは私だけだから。なにもなければ、これで終わりだし」
「いやです。なんでそんなことをしなくちゃいけない

んですか」
「転校してきた初日で悪いけど、いまやらないとダメなんだよ」
四人はきわめて事務的です。手慣れている風です。
「もちろん、いいんだよ、見せなくても。だけど疑いは晴れないし、君は毎日、いやな思いをするだろう」
「こんなところではムリです」
「いま、ここで、千晶に見せるんだ。すべてをさらけ出すことはない。スカートの中で見せればいいだけのことだよ。おれたちは向こうを向いている」
「でも、でも……」
泣きそうです。

怖いのです。
「さ、みんな向こうを向いて」
千晶に言われて男たちは囲むように向こうを向きました。うしろは壁です。
千晶はしゃがんで、私のスカートに手をかけました。そして中に頭を入れてきます。
涙が流れ落ちます。まさか、転校初日にこんなことになるとは思いませんでした。
スカートの中で、千晶がスマホで撮影した音がしました。
「終わったわ」
男たちはこっちを向いて、千晶のスマホを覗き込ん

でいます。逃げるなら今なのですが、もう、動けません。
「そう。それならいい」
彼らはいま撮影したばかりの画像を、突きつけるのです。
千晶が撮影したのは、私のお尻ではないような気がします。
「メス豚　聖香」というマーカーの黒々とした文字がないからです。
文字は毎日ではありませんが、ときどき書きたい衝動にかられるのです。そして下着をつけずに外出するのです。彼らが見せた写真は半年以上前のものです。

「命拾いしたな」
男たちはため息をついています。ギラギラしたものは不思議となくて、ただ高圧的なのです。
「これからも注目しているからね」
彼らが離れていきます。
「千晶。悪いけどこいつに謝って、学園の事情を説明しといてくれないか」
チームAの連中は、何事もなかったように四方に散っていきました。追い詰められずに、少し楽になりました。
行き場を失って、校門にもたれかかって泣いていました。

「行っちゃったわ。よかったわね、聖香」
千晶はすぐ横に残っています。
「事情はわからないけど、これ、どういうことなの？
誰にされたの？」
千晶はスマホの画像を切り替えました。そこにははっきりと「メス豚　聖香」と書かれたお尻が写っていたのです。
私は泣き続けるだけです。
「教えて。悪いようにはしないから」
涙をぬぐって千晶を見ます。同じ年ですが、私より体格もよく、お姉さんのような優しさを感じます。
「誰かにされたんじゃないわね？」

こっくりとうなずきました。ウソは言えません。
「自分で書いたの？」
うなずきました。
「いつから、こんなことをしているの？」
「一年ぐらい、前から」
実はもっとずっと前に始まったのです。悪いクセです。
「それをブログかなにかで公表してるわけ？」
「はい」
大粒の涙を流して、肯定しました。
「いまさら言ってもしょうがないけど、チームAのリサーチ能力はすごいの。転校生はもちろん、新入生、

教師や父兄の素行までも、少しでも疑惑があればチェックしている。学園を守るためにね」
「守る？」
「そうよ。こうして集めた情報を、すべて公表しているわけではないの。目的は学園の乱れを防ぐこと。それだけだから」
「どうして？」
「そうねえ。まずは、学園そのものが信用できないから。悪いけど、教師だって裏でなにをしているかわからない時代でしょ？　学生はいつ被害者になるかわからない。悪い学生もいるかもしれない。悪い父兄がいるかもしれない。チームＡは、私たちだけではなく、

ＯＢたちも手伝ってくれているの。わずか三年間の学生生活をできるだけよい環境で過ごしてほしい。それを脅かすものを許すわけにはいかないわけよ」
千晶が、私の髪を指で撫でてくれます。
「聖香は自分で、お尻に字を書いているのね？　それは誰かに脅されているわけじゃない。自分の楽しみのため？」
こっくりと、うなずきました。
「わかった。帰りながら、話そうか」
私たちは歩きはじめました。
「転校してきたのよね。なにか事情でもあるの？」
「うちは、母と姉と女ばかりなんです。母のいた会社

が倒産して、やっと見つけたのがここの会社だったんです。母の知り合いの紹介らしいです。別々に暮らすわけにはいかないので、転校してきました」
「そう。大変みたいね。お姉さんは働いているの？」
「専門学校に通っています。バイトして自分で学費は出していますけど」
「えらいじゃない」
言葉が詰まったので、千晶はなにかを感じたかもしれません。
「お尻の文字と関係がある？」
「直接にはありません。これは、私が勝手にやったことですから」

姉や母に知れたら、ものすごく怒られるでしょう。あの二人は必死に毎日を送っているのだから。
「お母さんが大変な思いをしてあなたたちを育てているのに、そんなバカなことをしていいと思うの？」
「すみません」
「私に謝ったってダメよ。だけど、チームＡが発見したっていうことは、深刻なことよ。まさか実名でブログやってるわけないよね。それじゃ、かばいきれないわ」
「もちろん違います」
「悪い人たちに見つかって、脅されておかしなことになったら大変よ」

言われてみればそうですけど。
「恥ずかしいことよね。いつも、どんな言葉を書いているわけ？」
「メス豚とかマゾとか……」
恥ずかしくて真っ赤になります。
「それって、願望？」
返事ができません。
お尻に字を書いて、下着をつけずに外出する……。
この遊びにはまったのはずいぶん前です。そして自分で写真を撮って投稿をはじめて、とうとう、匿名でブログまで。それはここ一年ほどの遊びです。
かなりの反響があるので、楽しくなってしまったの

です。
やればやるほど、自分が本当にマゾでメス豚なのだと思うようになってきて、それでオナニーをして何度もイクのが日課のようになっています。
「とりあえず、あなたの趣味ってことで、いい方に解釈しておくけど、これ以上のことがあったら、かばいきれないわよ」
千晶とメールアドレスを交換しました。
「私にはウソを言わないこと。そして、私たちの提案や意見を最大限に尊重してね。そうすれば、あなたの学園での安全は守られるのよ」
「はい」

ホッとしました。
なんとかやっていけそうです。

奥付

お読みいただき
ありがとうございました。

二〇一三年六月刊行　二〇一四年二版　二〇一八年一月三版

著作権　あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」　●ホームページ

●荒縄工房　ＳＭ研究室　●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。